

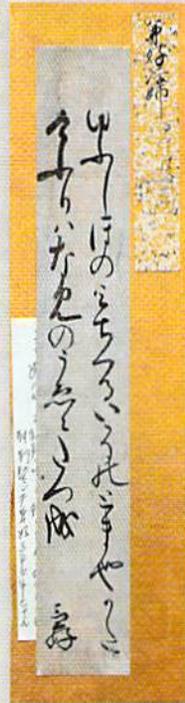
大学共同利用機関法人 人間文化研究機構国文学研究資料館

国文研ニュース

No.21
AUTUMN 2010

伝
吉田兼好
ゆふしほのみちくるいそのとまやがた
けぶりはなみのうゑにたつなり

兼好



目次

●メッセージ

研究対談「国文学研究資料館とイタリア」…… アルド・トリニ、武井協三、山下則子 1

●研究ノート

共同研究紹介

特定研究「在米絵入り本の総合研究」…… 小林健二 4

特定研究「近世的表現様式と知の越境 - 文学・芸能・絵画による総合研究 -」…… 山下則子 5

特定研究「陽明文庫における歌合資料の総合的研究」のご紹介…… 中村康夫 6

基幹研究「近世地域アーカイブズの構造と特質」の紹介 …… 高橋 実 7

●トピックス

第3回日本古典文学学術賞授賞式 …… 8

第34回 国際日本文学研究集会 …… 11

「集と断片」シンポジウム …… 13

新収資料展「物語そして歴史-平安から中世へ-」 …… 13

総合研究大学院大学 平成22年度入試説明会と特別講義 …… 14

表紙写真紹介 …… 14

正誤表

1 2 頁下から 4 行目	
誤	
<p>オルタナティブな媒体としての同人雑誌－昭和初期の新民謡 雅造について</p> <p>形との遊び、またはジャンルの追求－5行、4行、3行で翻訳 された短歌、俳句『みだれ髪』刊行に学ぶこと</p>	<p>サイトウ ケイ 齋藤 柱 (京都市立芸術大学非常勤講師)</p> <p>アイダ スレイメノヴァ A i d a SULEYMENOVA (国際日本文学研究センター外国人研究員)</p> <p>オソドアキコ 小曾戸明子 (医師)</p>
正	
<p>オルタナティブな媒体としての同人雑誌－昭和初期の新民謡 雑誌について</p> <p>形との遊び、またはジャンルの追求－5行、4行、3行で翻訳 された短歌、俳句</p> <p>『みだれ髪』刊行に学ぶこと</p>	<p>サイトウ ケイ 齋藤 柱 (京都市立芸術大学非常勤講師)</p> <p>アイダ スレイメノヴァ A i d a SULEYMENOVA (国際日本文学研究センター外国人研究員)</p> <p>オソドアキコ 小曾戸明子 (医師)</p>

研究対談「国文学研究資料館とイタリア」

アルド・トリーニ（客員教授・ヴェネツィア大学カ・フォスカリ准教授）

武井協三（国文学研究資料館教授・副館長）

山下則子（国文学研究資料館教授）

▼武井 国文学研究資料館がイタリアと交流を持つ最初のきっかけは、もう15年くらい前になると思います。今はヴェネツィア大学の教授になっておられるボナヴェントゥーラ・ルベルティさんが、国文研主催の国際日本文学研究集会で発表したいということで、私のところへ相談に来られた。彼はまだ若く、早稲田の大学院に留学しておられた時期でした。私は国際日本文学研究集会の係をやっている、しかも彼は早稲田大学文学部の演劇科に留学していたものですから、一応、私の後輩ということで、そこからいろいろな話をするようになりました。

国文研のイタリアとの交流は、こういったルベルティさんと私の関係が最初のきっかけだったと思います。その後、いろいろな展開をしていくんですけども、その後のことは、むしろ山下先生のほうが詳しいかもしれません。

▼山下 平成8年度、1997年2月から、国文研のイタリアでの日本古典籍調査が開始されました。その1人として、平成10年度からこの調査に加わったということが、私にとってイタリアとの交流のはじまりでした。つまり13年くらい前から在伊古典籍調査が始まり、そのころは鈴木淳教授、ロバート・キャンベル助教授（当時）、和田恭幸助手（当時）、やすゆきそういった方々を中心として、4人くらいのチームを組んでイタリアに行っていました。

最初に未調査の日本古典籍がたくさんあるという理由で、サレジオ大学のマリオ・マレガ文庫とキオッソーネ東洋美術館が調査先として選ばれ、サレジオ大学には全部で6回行くことになりました。途中から調査メンバーが減ってしまったのですが、マリオ・マレガ文庫の目録ができたのが平成14年、2002年です。それが終わってから、

ヴェネツィア東洋美術館の調査をし、その後にはナポリ国立図書館の調査もいたしました。ヴェネツィア東洋美術館は平成16年、2004年に、ナポリ国立図書館ルッケージ・パツリ文庫は平成18年、2006年に目録が完成しました。キオッソーネ東洋美術館は、まだ続行中の部分がありますが、4カ所の調査が終わり、目録はすでに3カ所が出ていて、あと1カ所を残しているという状態です。

そういった古典籍調査と、もう一つ忘れてならないのは、安永尚志教授（当時）のイタリアとの交流です。安永教授の主導で、国文研とAISTUGIA（イタリア日本研究学会）との協力関係が打ち立てられ、2005年9月にフィレンツェでAISTUGIAと共催した第1回日本文学国際共同研究集会が行われました。安永教授の退職後、昨年9月にミラノ・ピッコカ大学で第2回の日本文学国際共同研究集会を開催しました。このときのテーマは「日本の〈笑い〉：文学・芸能・絵画の表現様式を基盤に」（"Humor in Japan"）で、これにはルベルティ先生やフィレンツェ大学の鷺山郁子先生、ローマ大学のダニエラ・サドゥン先生やマティルデ・マストランジェロ先生、国文研からは武井教授と小林教授と山下、それから高知女子大の佐藤恵里教授が御参加下さいました。実はその1年前、

イタリア、レッチェのサレント大学で開催されたEAJS（ヨーロッパ日本研究学会）に「芸能・文学における古典大衆化による笑い」というテーマで、国文研のメンバーがパネル参加し、ルベルティ先生にもパネルに

入っていただいたのですが、これが好評だったということが下敷きにあつて、ミラノの第2回日本文学国際共同研究集会も〈笑い〉というテーマで行われました。この集会は報告書も作ってイタリアの日本文学研究者の皆さんにお配りしました。

ミラノの後にはヴェネツィア大学に立ち寄り、日本文芸研究集会と称して「日本の演劇」をテーマに研究講座を開催しました。そこではトリーニ先生に開会のご挨拶をいただきましたが、ヴェネツィア大学の学生さんたちが非常に熱心に我々の講義を聞いて下さって感動しました。30人ものイタリアの学生が、日本語での発表を聞き、日本語で鋭い質問をたくさん寄せて下さって、私たちにとはとてもうれしい体験でした。

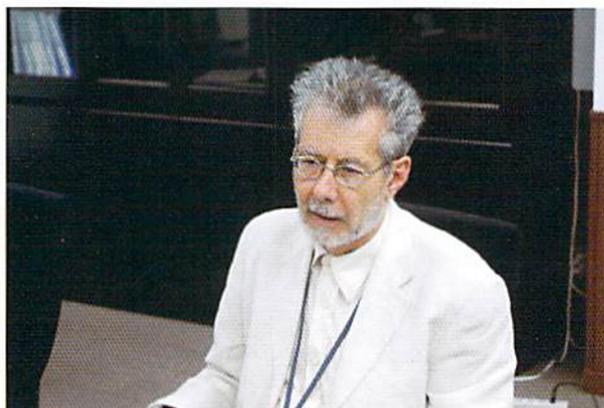
このように国文研とイタリアとの交流は、武井先生の国際日本文学研究集会でのルベルティ先生とのおつき合いを源として、安永教授のお働き、旧文献資料部が中心となったイタリアにおける日本古典籍調査というのが合体した形で、大変親密な関係が成り立っているのだと思います。

▼トリーニ そうですね。国文研とヴェネツィア大学との間に協定が結ばれてからもう何年になるんでしょうね。

▼武井 4年以上ですかね。

▼トリーニ 私は古典語の専門家ですが、文学専門でなくても国文学研究資料館には大事な資料があり、私の研究にとっても国文研との交流は大切です。今回も客員教授として国文学研究資料館に来させていただき、イタリアでは資料が乏しいので、こちらでたくさん資料を集めてイタリ





アに持ち帰り、ゆっくり研究したいと思っています。幸い国文研の図書館は、文学だけではなくて古代言語の研究にとっても有益な資料がたくさんあります。

ヴェネツィア大学では、日本文学の現代研究のほかにクラシック・スタディーズ、古典もやっています。ただどちらかというと、現代、近代のほうが先生方も学生も多い。しかし、やはり古典も忘れてはいけないと思うのです。最近、イタリアだけではなくて、大きくいえばヨーロッパ全体で古典の研究が少し復活した感じがしています。どの分野でも本格的に研究するためには、古典がわからなければならぬという理由からです。イタリアの先駆者の時代は日本語を余り知らなくても日本文学研究はできたのですが、これからは本格的な古典研究をする場合は、原文のテキストを読まないといけないと思っています。

▼武井 日本のテキストを読まなければいけないということに関し、国文学研究資料館は何かお役に立っていますか？

▼トリーニ 一冊役に立っているのは「国文学論文目録データベース」です。本当に信じられないくらい素晴らしい。次は古典本文にあたるデータベースです。安永先生とも何回も話したんですけれども、イタリアでアクセスして資料をダウンロードできれば、それがやはり一番楽ですね。ぜひ将来はそうなってほしいと思います。

▼武井 その点に関しましては、外国にいても古典原本の1頁づつのデジタル写真が見られるデータベースの公開を開始しています。これを大幅に進めるため、いま文

科省に予算を請求しております（笑）。もしその予算がつけば、海外でも何千、何万という日本古典籍が原本写真で見られるようになるので、外国の日本文学研究者の方にとっては、たいへんな朗報になると思います。

▼山下 ルベルティ先生の御発表でもそうだったんですけれども、ヴェネチア大学では原本資料に当たって、原典の用例を引こうという、そういう日本での研究方式と全く同じような方式をとられる方が多いですね。国文研で原本資料をデジタル公開すれば、少しはお役に立つのではないかと思いますね。

▼トリーニ そうですね。我々外国人の研究者にとっても、本文の大事なところや、ちょっと微妙なところは、やはり原典を調べたいのです。

▼武井 話は少し変わりますが、ヴェネツィア大学では日本文学、日本文化を勉強する学生はどのくらいおられますか？

▼トリーニ 去年の12月で、日本語を専攻している学生の数は1,284人です。

▼武井 そんなにいますか！

▼山下 すごいですね。日本語は最近、人気がなくなってきたのではないかと感じていたんですけれども。

▼トリーニ 中国語をやっている学生はもう少し多いですけども、1,450人くらいかな。あと韓国語は500人くらい。私たちの大学では日本語は中国語に次ぐ言語ですよ。英語は3番目。だから、学生が多いから大変ですよ（笑）。

▼武井 その学生たちというのは、どういうふうになっていくんですか。就職とか。

▼トリーニ 昔はヴェネツィアだから観光関係の

仕事がありましたけれども、今はそんなになんていっていいですね。あとは、昔は日本の商社に勤めるというのがありました。今の不景気の中でそれも少なくなっていったって…、ですから不思議なんですけど、毎年中国語の学生も、大体5～10%の間くらいふえていますよ、日本語も同じですよ。

▼武井 それはどういうことなんでしょうか。若い人たちの、例えばよく言われるようにアニメだとか漫画とかを通じての日本への興味というようなことと関係あるんでしょうか。

▼トリーニ もちろんそうですね。そういうのが多いですね。中国語の場合は多分、就職を考えて選択すると思うんですけども、日本語の場合はそうではないと思います。聞いてみたら、一番の動機としては、やはり日本文化に興味があるというのです。日本文化というと、18歳、19歳では漫画とアニメ、そこから入るんですよ。そこから入って、後はどこに行くかわからないのですが…。

▼山下 それだけ日本文化に興味を持っていて、日本語がある程度できる人がたくさんいるのをほうっておくのはもったいないような気がいたしますね（笑）。

▼トリーニ そうなんです。ヴェネツィア大学だけではなくんです。ローマ大学でもそうなんです。パリのINALCO（東洋言語文化研究所）とか、あとドイツでもふえていますよ。今、ヨーロッパでは日本語を学ぶ学生が多くなっています。

▼武井 日本が経済的に元気だった時期は日本の企業に就職しようとか、そういう



意図を持って日本語を勉強する学生がかなりいたんだと思います。けれども、大学での自分の勉強を選択するのに就職ということだけを考えるというのは、それはちょっと不健全で、むしろ自分が持っている興味を極めたい、ということのほうが、学問をやる姿勢としては本来なのではないか。就職のためだけではなく、自己を知りたい、世界を知りたいという、純粋な、知的な興味というものが、ヨーロッパの学生に健在なのだとすれば、これは注目すべきことだし、嬉しいことですね。

▼トリーニ 忘れてはいけないと思うんですけど、特にイタリアはルネサンスとヒューマニズムの国です。そういう伝統はまだ根強いですよ。もっと言うと、イタリアの大学でラテン語を教えていない大学はない。古代ギリシャ語もそうです。ヒューマニスティック・スタディーズつまりローマの古典、ギリシャの古典は必ずこの大学でも教えます。それが基本です。

▼山下 日本では若い人の中で古典離れがあり、古典軽視が進んでいます。イタリアで日本の古典に興味を持っていただくというのは大変うれしいですね。「ヒューマニスティック」ということに関して言いますと、この前、国際共同研究集会でやった「日本の〈笑い〉」というものに対して、イタリ

アの方はとても興味をお持ちになるんですね。ですから、「笑い」に関してシンポジウムを2年続けて2回もやったわけです。それがなぜかというのが、先生のお話を聞いて、少しわかったような気がします。特に「笑い」は江戸時代の文学や演劇を理解する上で、とても大事な部分なので、イタリアでもっといろいろな近世関係の発表をしたほうがいいかなと思っていますところですよ。

▼武井 いまの山下先生のお話とも関連するのですが、我々は海外の研究者の方たちと、日本文学についての共同研究集会をやってきました。イタリアだけでなくフランス・アメリカ・台湾・中国・インドなどでも国際研究集会をやっています。そういう国際共同研究発表会、いわゆる国際シンポジウムだけではなく、この前ヴェネチア大学でやったような、学生さんに対する講義の大事さがだんだん我々にもわかってきました。ただ行って、最先端の研究発表をやるだけではなく、若い人たちに講義とかワークショップとか、そういうものをやることをもう少し開発していったらいいのではないかと思います。

▼トリーニ これからはそういうのを増やしてほしいです。4年生と5年生の学生は、もう日本語の講義で大丈夫です。例えば

私の授業科目の中で、国文研の先生方のだれかがいらして、私の時間帯の中で教えていただく。ただ聞くだけではなくて単位になるようにする、そういう制度を考えたらいいかもしれませんね。

▼武井 そうですね。授業の一部をお引き受けするというのが、外国の大学の制度のもとで一番簡単に実現しやすいのではないかと。教授会などで面倒な手続きを踏み、コンセンサスをとる必要もなく、御自分の授業の中だったら自由にできる。授業の範囲内でやってしまうというのは一つの手ですね。

▼山下 昨年のヴェネチア大もそうですが、コロンビア大でも大学院生、学生の前で話す機会があったのですが、とにかく学生さんが非常に熱心なんですね。日本よりも海外の学生のほうが日本文化研究に興味を持っているので、もっとそれを継続的にやっていければ……

▼トリーニ そうですね。もっと継続的にして、単位も考える。ヴェネチア大としては割と簡単にできると思います。

▼武井 若い外国人の日本文学研究者を育てていくというのは、国文学研究資料館にとっても大事なミッションです。その展望が一つ開きかけていると思います。どうもありがとうございました。



対談後の記念写真（左から武井教授、トリーニ客員教授、山下教授）

特定研究「在米絵入り本の総合研究」

小林 健二（国文学研究資料館教授）

平成 22 年度から 24 年度までの 3 年間、特定研究「在米絵入り本の総合研究」が実施される運びとなった。メンバーは、小林を代表として、館内からは齋藤真麻理准教授・武井協三教授・寺島恒世教授・大友一雄教授・江戸英雄助・恋田知子機関研究員の 7 名、外部からは小峯和明立教大学教授・石川透慶応大学教授・徳田和夫学習院女子大学教授・福原敏男武蔵大学教授・高岸輝東京工業大学准教授・藤原重雄東京大学史料編纂所助教・ロバートキャンベル東京大学教授の 7 名、そして海外からハルオシラネ コロンビア大学教授・渡辺雅子メトロポリタン美術館主任研究員・ケラーキンブローコロラド大学准教授・ロベルタストリップリ ニューヨーク州立大学ビンガムトン校准教授の 5 名、合わせて 19 名による共同研究である。

これまでの古典文学研究は、本文（テキスト）の研究が主流であり、絵画的（イメージ）な側面は軽視されてきたのではなかろうか。しかし、絵を伴って享受された古典籍は多くあり、その絵画部分の分析と絵画とテキストとの融合をいかに解明していくかが、今後の古典文学研究において重大な課題であることは、ここ数年来、各学界で言われ続けていることである。

海外に所蔵される古典籍のうち、写本で伝わる絵巻物や絵本、また絵入り版本（以下、これらを総称して絵入り本とする）は、江戸時代末期から今日に至るまで大量に流出したものであり、現在の日本では見られなくなった稀覯本を多く含んでいる。それらの資料を無視しての日本文学・文化の研究はもはや不可能と言ってもよい。

例えば、源氏千年紀を機に注目された、江戸時代前期の作成になる幻の「源氏物語絵巻」は、現在、二十巻弱の存在が報告されているが、その内の「末摘花」中

下巻と「帯木」一巻がスペンサーコレクションに蔵され、「賢木」断簡二葉がパーク・コレクションに所蔵されている。パーク本の連れの断簡二葉がベルギーの個人蔵になっていることも併せて、もはやその研究は海外の資料なしでは論じられない段階に入っているのである。

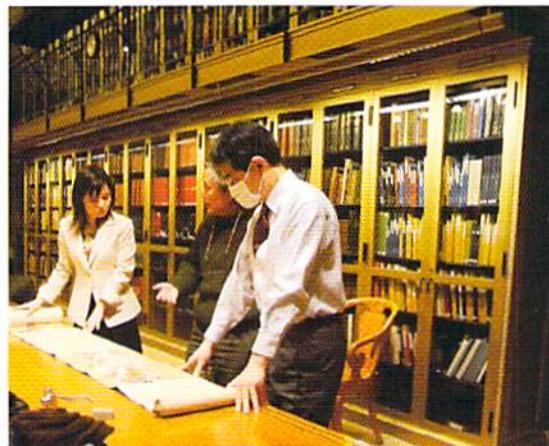
しかし、在外資料は所蔵機関が遠隔地にあり、また目録などが整備されていない現状もあって、その調査と研究は非常に困難であると言わざるを得なかった。絵入り本の正確な書誌情報と写真による収集が、国文学研究のみならず、美術史・文化史などからも切望されているのである。

この共同研究の目的は、平成 21 年度より進行中の科学研究費による基礎的な研究に連動させて、ニューヨーク公共図書館のスペンサー・コレクションを中心とした在米の絵入り本を総合的に調査研究することである。スペンサー・コレクションの絵入り本は、古くは奈良時代の古経典から新しいところでは江戸時代末期の草双紙にまで及ぶ多岐多様な内容で、このコレクションの資料を研究することにより、上代から近代までの絵入り本の歴史を通観することができる。従って共同研究のメンバーも、国文学の研究者だけでなく、芸能・歴史・民俗・宗教・美

術史など多方面の研究者の参加が求められ、多角的に研究を進めていくことが大きな特色となっているのである。

また、スペンサー・コレクションだけでなく、ニューヨークやその近郊の所蔵機関である、パーク・コレクション、ウェーバー・コレクション、メトロポリタン美術館、ボストン美術館、シカゴ美術館などにも優良な絵入り本が存していることが知られており、それらの調査も視野に入れていきたい。

共同研究の成果は、平成 23 年 9 月にニューヨークのコロンビア大学で行われる国際シンポジウム「日本の視覚文化—芸能・メディア・テキスト」において一部報告され、バイリンガルで刊行される計画であり、平成 24 年には共同研究メンバーによる絵入り本研究の総合研究書を刊行し、その成果を学界に問う予定である。絵入り本研究の重要性は近年説かれているところであるが、この共同研究を文学・歴史・美術史などの研究者が多面的に行い、その成果を広く発信することによって、絵入り本研究が学際的に発展していくことが見込まれる。また、在外の研究者が参加することによって、これまで未開拓であった在外絵入り本資料の発見や研究が一層盛んになることも期待されよう。



スペンサーコレクションでの調査風景

特定研究「近世的表現様式と知の越境 —文学・芸能・絵画による総合研究—

山下 則子（国文学研究資料館教授）

本研究プロジェクトは、近世の文学・芸能・絵画などに共通して見られる、特色ある表現様式を学際的・総合的に明らかにすることを目的としている。

研究期間は、平成22年度～24年度。プロジェクトメンバーは、浅野秀剛大和文華館館長・伊藤善隆湘北短期大学准教授・井田太郎国文研助教・岩切友里子国際浮世絵学会会員・加藤定彦立教大学教授・倉橋正恵立命館大学ARCPD・佐藤恵里高知女子大学教授・武井協三国文研副館長・崔京国明知大学校教授・丹羽みさと国文研機関研究員・延広真治東京大学名誉教授・原道生明治大学名誉教授・光延真哉白百合女子大学専任講師・安原真琴立教大学非常勤講師・山本和明相愛大学教授・吉丸雄哉三重大学准教授と、研究協力者の陳可再総研大学院生の計18名である。



瀟湘八景詩歌鈔

平成16～21年度の文学形成研究系「近世文芸の表現技法〈見立て・やつし〉の総合研究」プロジェクトの成果を一部基盤とし、新たに近世文芸の表現様式全般に視点を拡大発展させたもので、「〈見立て・やつし〉の総合研究」プロジェクトは、近世の表現を「見立」「やつし」という表現様式に限定して着目し、その特質を明らかにして終了したものが、本プロジェクトでは、そこから新たに発生した問題「教訓」「評判」「尽くしもの」「口合」「当世化」等を内包

する、様々な近世的表現様式全般へと視野を拡大して、近世期の文学・芸能における発想方法の特質を、中古・中世からの流れも含めて、明らかにしようとするものである。また、各ジャンルに関わる人材や身分階層の交流・越境という切り口によって、より精確で新しい成果を得ようとするものである。

本プロジェクトの研究の意義は、分野を超えた日本文化の発想方法の研究に、一過程を築くことができることである。また、これまであまり注目されなかった多くの文学資料・芸能資料・



風流人倫見立八景 かこい
の夜の雨

絵画資料に解釈的研究を加えて研究を進化させ、文芸資料をどのように学術的に解釈するのかを中心に、先駆的実証的な研究方法を提示することである。

今まで注目されることが少なかった、日本文芸に横断的に存在する表現様式を、近世の文学・芸能・絵画の研究者が学際的に研究することによって、日本文化の基底に迫る成果が予想される。滑稽性の含まれる近世文芸作品は、海外でも高い関心を持たれている。日本文化の基底に繋がる特色ある表現様式の研究の成果は、日本文芸の国際的研究という立場からも意義深いものとなるはずである。また俳諧・狂歌など町人や武士等が交流しつつ創作した土壌が、それぞれの階層・集団を越境した新たな文芸を生むという、人的交流

の果たした意味も明らかにすることになるであろう。さらに日本古典文芸の魅力を実証的にビジュアルに、一般の文学・芸能・美術の愛好者に対しても



絵本花葛蘿

アピールすることができる。

第1回の共同研究会は、5月1日小石川後楽園の会議室で行った。中国名勝の縮模という庭園の表現に触れるためである。内容は陳可再氏「林羅山『小廬山記』について」・丹羽みさと氏「小石川後楽園の歴史と特徴」・光延真哉氏「名物評判記と劇界—都立中央図書館所蔵『役者とんだ茶釜』を中心に—」。第2回共同研究会は7月28日国文学研究資料館で行った。内容は倉橋正恵氏「役者似顔給金付について」・丹羽みさと氏「国文研蔵 幾勝模写「見かけはこわ



戯絵兄弟 弁慶尻馬

いがとんだい、ひとだ」小考」・山下則子「国文研蔵「絵本花葛蘿」について」。どちらも多くの参加者があり、特に第2回は海外5カ国からの参加があり、このテーマが国際的にも注目度が高いことを証する研究会となった。第3回は国文研で吉丸雄哉氏「近世における職人歌合」・岩切友里子氏「錦絵の「絵兄弟」について」を開催する予定である。平成23年度には、一般にも公開する展示・シンポジウムなども計画している。

特定研究「陽明文庫における歌合資料の総合的研究」のご紹介

中村 康夫（国文学研究資料館教授）

研究期間として、平成21年度から23年度までの3年間、特定研究「陽明文庫における歌合資料の総合的研究」を実施している。メンバーは、中村を代表として、館内からは寺島恒世教授・リサーチ・アシスタントの吉田小百合氏の2名、外部からは井原今朝男国立歴史民俗博物館教授、倉本一宏国際日本文化研究センター教授、久保木秀夫鶴見大学講師、後藤祥子日本女子大学名誉教授、小山順子天理大学講師、酒井あすか元国文学研究資料館機関研究員、佐藤明浩都留文科大学教授、杉本まゆ子宮内庁書陵部文書研究官、名和修陽明文庫・文庫長、日比野浩信愛知淑徳大学非常勤講師、山本登朗関西大学教授、赤澤真理日本学術振興会特別研究員、舟見一哉神戸市立工業高等専門学校講師、山本啓介日本学術振興会特別研究員14名、合わせて17名による共同研究である。

陽明文庫は近衛家の所有に係る貴重文化財を大量に継承しており、その文物の全容のうち大半は政治史的、文化史的に一級の価値が認められているものである。この政治的側面と文化的側面は相互に不可分であるけれども、陽明文庫の歴史をやや強く意識する場合には政治的側面が若干強くなるように思われる。それに対して、近衛家の人的交流を中心にして文化活動を捉える場合には文化的側面が強く意識されてくる。その人的交流は天皇家に関わる場合が多い。

摂政・関白を輩出した藤原氏北家の流れを汲む近衛家は、当然のように藤原道長の『御堂関白記』を初めとする自筆の古記録を所持していたりし、信じたがたいほどの宝物を所蔵していたりするので、研究者はもちろんのこと、一般の知識人もその活動をかなり注意深く見守っている。そして、当然のことながらその所蔵する文物に

ついて長年にわたって研究も進められてきた。

今回、国文学研究資料館と陽明文庫との共同主催の展示を平成23年の秋に予定することになり、陽明文庫の陽明文庫らしい側面に注目すると共に、国文学研究資料館としての研究眼の力強さも提示したいという思いが吐露されて、この研究プロジェクトが発足することとなった。

今までも、陽明文庫の協力の下、何人も研究者が陽明文庫所蔵の文物を繕っているが、今回の研究プロジェクトの企画に当たり、国文学研究資料館としては、陽明文庫の所蔵文化財の内、特に歌合関連資料群に注目することにした。それは、和歌研究の活発な現況にあって、ひとつ歌合の研究がやや停滞しているのではないかと指摘されるためである。

ここにその研究史を説いている時間はないが、国文学者なら誰でも知っている萩谷朴氏の『平安朝歌合大成』や堀部正二氏の『纂輯類聚歌合とその研究』という大研究以後は特に目立った取り組みはなく、何らかの突破口を歌合研究に対して開きたいと思う。しかし、展示までわずか三年程度の時間があるだけであるので、この研究プロジェクトとしては、何らかの一步を示すことができれば上出来なのかもしれないと思う。あるいはまた、歌合研究が何故壁にぶつかっているのか、それはどういう壁であるのかということを見つけるだけにとどまるかもしれない。

歌合は、歌人が左右に分かれて和歌の勝ち負けを競う遊技で、判者が勝ち負けを判定する。その由来は古く、古今和歌集にもすでに歌合の歌が所収されている。

平安時代の文学を研究している人には周知のことと言って良いと思うが、平安時代の文学作品の原本はほとんど江戸時代

以後のものしか現存せず、その中では古今和歌集や源氏物語・伊勢物語などだけが例外としてもう少し古い文献が残っているという程度である。

そういう中であって、歌合については、十卷本歌合といい、二十卷本歌合といい、古来編纂されたものが伝えられており、若干形を変えている場合もあるけれども、本文的にはかなり信用度の高い文献が残っている。こういう幸せな状態をできるだけ豊かな情報として受け止め、研究の対照としていくと、かなり新しいものが見えてくるのではないかという期待は誰しもが抱くところである。

昨今は、昔と違って、研究者が入手できる情報はかなり豊かであり、以前は全く見られなかったものも最近では見られるようになったりして、情報の質と量の両面から研究が進む余地が増えていると言える。大きな作品の研究も今日は再検討が当たり前であり、従来の研究者も大いに期待しておられることと思う。

しかし、当然のことながら、資料という《物》は昔と変わっていないので、それを見る側が《新しく見る》ことができなければ新しい研究は何も生まれない。

研究会を通して報告される知見には、間違いなく新しく発見された事柄もあり、この研究会が進められることで僅かながら進み得たこともある。しかし、当然のことながら、それは文学の本質に関わったり、文学史の流れを書き換えたりするほどのことには至らない。ここに、いわば《一步の前進》を展示でお示しすることによって、それが向後繰り返され、蓄積されることによって、さらなる前進があり得ることを見ていただきたいと思っている次第である。

基幹研究「近世地域アーカイブズの構造と特質」の紹介

高橋 実（国文学研究資料館教授）

2010年度から新規の共同研究「近世地域アーカイブズの構造と特質」（代表高橋実）が当館基幹研究の一つとして開始された（期間3か年間）。基幹研究は当館の基盤的な業務との関連を強く意識した研究領域として設定されたものであり、本研究は1951年設置の文部省史料館以来の活動のなかで収集されてきた武家・公家・豪農家・商家・職人・寺社・自治体などの主として近世・近代資料群の情報資源化、保存公開体制の高度化に関わり、その一環で実施されるものである。

とくに今回の研究は、近世の地域資料を対象にアーカイブズ学に立脚した視点のもとで研究情報基盤の構築を目指すとともに、その前提として資料の管理・伝来の経緯やその構造的な特質を、地域特性などにも留意しながら明らかにする。具体的には館蔵資料や他の資料保存機関が収蔵する資料を主な対象に、まず①資料群の構造を理解する基礎として、資料群を発生させた組織体における文書・書籍の作成や管理・保存、あるいは利用や廃棄のシステムを歴史的に究明する。さらに②現存するに至った経緯や環境にも留意して、組織の構造・機能との関連で資料群の全体像を追究する。③また、これらの情報を生かした整理記述、モノそのもののコントロール方法について検討することも目的とする。

以上の研究は、いずれもアーカイブズ収蔵機関が日々取り込む業務に関わる研究であり、当館が実施するアーカイブズ・カレッジでのカリキュラム編成との関連で捉えるならば、モノ（資料）とその情報についての具体的なコントロールに関する「アーカイブズ管理研究」分野と、管理すべきモノそのものを理解するための「アーカイブズ資源研究」分野を横断する研究といえる。

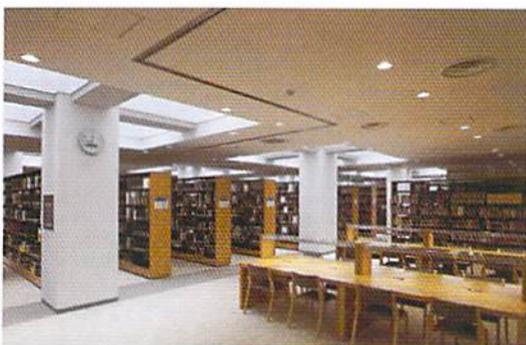
日本においては、アーカイブズを保存す

る文書館の設置が遅れており、それがアーカイブズ管理研究、アーカイブズ資源研究の遅れをもたらす一要因となってきた。モノの管理も研究を欠いてはその深化は望めない。情報技術の高度化、モノそのものに関する研究の進展とも関連して、我々は新たな研究に取り組まねばならない段階にある。そのため本研究では歴史学・情報学・保存科学・組織学などの達成を踏まえて研究展開を計るものである。

研究メンバーには、アーカイブズ機関に勤めている方、モノ資料・書籍資料を取り扱える方、アーカイブズ学・保存科学・歴史学・図書館情報学などに関わる方、そしてアーカイブズ学の若手研究者に参加いただいた。本年度のメンバーは高橋実・青木睦・入口敦志・大海洋司・大友一雄・加藤聖文・山田哲好・渡辺浩一・西村慎太郎（以上館内）、久留島浩・白井哲哉・

西向宏介・東昇・山崎一郎・山崎圭・柴田知彰・坂口貴弘・森本祥子・榎本博・荒川将・南隆哲・工藤航平である（敬称を略す）。

研究分担は、大まかに（1）記録管理システム論、（2）資料群構造分析論、（3）情報記述論に分かれ、本年度はすでに2回の研究会を開催した。なお、研究成果は論文集の形で公刊することを予定しているが、その過程で適宜公開の研究集会を開催し、本研究での議論を発表する予定である。今年度も来年1月に公開研究集会を予定している。また、ここでの研究成果は、当館での基本業務に直結する。研究成果はアーカイブズ・カレッジ、資料の収集・整理・公開、「史料目録」編成、歴史アーカイブズデータベースの作成に反映されることになる。



第3回日本古典文学学術賞授賞式

日本古典文学学術賞は、財団法人日本古典文学会が主催していた日本古典文学会賞を継承し、若手日本古典文学等研究者の奨励、援助を目的として当館賛助会に設置しています。第3回日本古典文学学術賞は平成21年1月～12月までに公表された日本古典文学に関する論文又は著書を対象の業績として、関連諸学会から推薦された選考委員及び過去の受賞者（日本古典文学会賞受賞者も含む）から推薦された対象者について、論文又は著書を選考委員会で審議しました。

その結果、第3回の受賞者を久保木秀夫氏（鶴見大学文学部講師）、水谷隆之氏（佛教大学文学部人文学部講師）に決定し、平成22年7月23日（木）にパレスホテル立川（立川市曙町）で授賞式を開催しました。

授賞式では、選考委員会の横井孝委員長（実践女子大学芸芸資料研究所所長）から、選考の経緯について報告があり、その後、選考委員会を代表して大橋正叔委員（天理大学文学部教授）、佐々木孝浩委員（慶應義塾大学斯道文庫教授）から受賞者の業績について講評がありました。次ページから講評を掲載します。



受賞した久保木秀夫氏



受賞した水谷隆之氏

■「日本古典文学学術賞」選考要綱（抜粋）

趣旨：

日本古典文学学術賞は、日本古典文学会賞を継承し、若手日本古典文学等研究者の奨励、援助を目的とする。

選考：

国文学研究資料館に選考委員会を置き選考する。

選考委員：

- 関連諸学会から推薦された委員6名
- 国文学研究資料館賛助会運営委員会委員長1名
- 国文学研究資料館教員1名
- 日本古典文学学術賞選考委員会が必要と認めた委員若干名

対象者：

40歳未満の若手研究者 3名以内

対象とする業績：

前年の1月から12月までに公表された、日本古典文学に関する論文又は著書

選考方法：

選考委員からの推薦及び過去の受賞者（日本古典文学会賞）からの推薦による対象者の論文を選考委員会で審議。自薦は受け付けない。

賞・賞金：

賞状と賞金20万円

第3回日本古典文学学術賞選考講評

久保木秀夫氏

『中古中世散佚歌集研究』

佐々木 孝浩（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授）

久保木秀夫氏の当該年度の受賞対象となった業績は、単著の論文集『中古中世散佚歌集研究』（2009年11月、青簡である。本文が完全な形で伝わることのなかった中古中世期成立の歌集について、古筆切や残欠本、あるいは佚文などによって復元的な研究を行ったものである。その構成は三章からなり、第一章は「平安時代」、第二章が「鎌倉・南北朝時代」、そして第三章は「資料紹介」である。第一章は順に「道真集」「具平親王集」「大斎院御集」「良玉集」「法輪百首」「歌苑抄」「諸社十二巻歌合」「懐中抄」の八節から、第二章は「類聚歌苑」「京極派贈答歌集」「嘉元元年十月四日京極派歌合」「庭林集」「新撰風林和歌抄」「自葉和歌集」「松吟和歌集」の七節と、「古筆切のツレの認定」の付節からなっており、第三章には「彰考館徳川博物館蔵「本朝書籍目録」「岡山大学附属図書館池田文庫蔵「歌書目録」」の二節を納めている。

私家集、私撰集、定数歌、歌合等、多種類の歌集が対象となっており、専門の研究者も聞き覚えのない作品も少なくない。これらの論考を繋ぎ合せているのは、研究方法の共通性である。本文資料の博捜は当然のこととして、その作品の関連情報もも集めて、時代の文学状況を踏まえて、作品の成立・伝来・享受等を実証的に論じ、そこから浮かび上がる新知見を提示するという、研究姿勢とも言える方法を貫いているのである。

古筆切が有する最も魅力的にして有益な研究価値が、未知なる本文を見出しうることにあることは、誰しも認めるところであろう。そのことを十二分に理解し、最も意識的にその価値を追求したのが本書であると言える。そうした研究は、古筆資料の古さと珍しさに凭り掛かり、関連資料や周辺の状態への目配りや丹念な調査を怠りがちであるが、氏はそうした研究とは一線を画することを意図して、方法論を模索しその実践を行ったのである。

古筆切研究はまた、珍しいもの探しの無計画な研究であると評されかねない性質を有している。久保木氏の業績がそうした批判的な感想を封じ込める力を備えているのは、成果の背後に極めて計画的かつ網羅的な資料収集作業が存在しているからに他ならない。提示された古筆切の種類や量に明白であるが、氏の作成になる『散佚歌集切集成』（『調査研究報告』23 2002・12、増訂第一版 2008・3）や、国文学研究資料館ホームページの「古筆切所収情報データベース」の存在が、雄弁にその努力と苦勞を物語っている。その調査対象は古筆切や写本

のみならず、東京大学史料編纂所の写真帳や充立目録の図版にまで及んでおり、あらゆる可能性を求めての地道な探索作業がなされているのである。

そうした作業の末に見出した資料を、その作品の性格に応じた方法で実証的な分析研究を行い、抑制の効いた穏当な推論を交えた結論を導き出し、和歌史上にその作品を位置付けているのである。「道真集」で『新古今集』の撰集資料をほぼ明らかにし、「歌苑抄」で同集が基本的に歌林苑と無関係であることを示し、「諸社十二巻歌合」で西行の未知なる作品を紹介し、「類聚歌苑」で同集が『続拾遺集』の主要な撰集資料であったことを突き止め、「京極派贈答歌集」で京極派の特異な活動を浮き彫りにするなどなど、本書で提示された新知見の量と質は誠に卓抜したものである。それらにより氏が意図した既存の文学史の補訂にも成功しており、有益な目録資料の紹介や完備した索引も本書の価値を一層高めている。本書の研究的な達成度は極めて高いと評せるのである。以上が本選考委員会が、久保木氏の業績を本年度の古典文学学術賞に値するものと判断した所以である。

より一層の研究の進展を願って吹毛の難を挙げるとすれば、全体を貫く考察や結論的なものが見当たらないということであろうか。散佚歌集とはなんであるのか、散佚した理由はなにか、散佚作品を含めることによって和歌史はどのように再構築されるのか、以上は単なる例であるが、研究の蓄積の上に立たなければ得られない、総合的な結論というべきものを見せていただきたいのである。それはこの研究方法を追求した久保木氏にしかできないことであるはずである。

散佚文学作品を伝える古筆類資料の数は、歌集以外に分野を広げてもそれほど多くを期待できないことは、久保木氏自身の自覚されるであろう。今回の受賞対象は散佚歌集研究であったが、これまでの業績に明らかのように氏は古筆切のみを研究対象とされているわけではない。その視野の広さと驚異的な調査能力をもって、より総合的な文学史の構築に繋がる研究を継続していただくことを祈念してこの講評を閉じることとした。

水谷隆之氏

『団袋の西鶴—団水との両吟半歌仙について』

大橋 正叔（天理大学教授）

水谷隆之氏「『団袋の西鶴—団水との両吟半歌仙について』（『国語と国文学』平成21年7月号）は、『俳諧団袋』（元禄4年正月刊 北条団水編）に所載する西鶴と団水との「両吟半歌仙」を取り上げ、元禄初期当時の俳風を踏まえて、西鶴が自らの俳諧を当風の疎句付けに沿って実践した半歌仙であると論証し、西鶴の俳諧活動の再評価を俳諧史の流れから論じたものである。その論述の手順は、「両吟半歌仙」の付合に明解な読みを示し、当時の元禄俳諧の〈心付〉と宗因流談林俳諧の〈ぬけ〉〈とび〉といった手法との関連を指摘する先学の研究をさらに発展させて、付合の連想を重ね〈心付〉の疎句へと導く西鶴の新たな試みを、『西鶴独吟百韻自註絵巻』（元禄4・5年頃成力）にいう〈心行〉との関連をも指摘し、明らかにする。

同時期の西鶴と大阪俳人による賀子編『蓮実』（元禄4年七月刊）所載「四吟歌仙」と「両吟半歌仙」とを比べ、「四吟歌仙」に旧来の談林風付合が少なく無く見られることについて、大阪と京都の俳風との違いによるところ大きく、「両吟半歌仙」には、むしろ、「四吟歌仙」とは異なる西鶴の新風への試みが積極的に意識された結果と、その相違についても日記りはなされている。さらに、「当時の西鶴俳諧の本質は〈俳言〉による〈俗〉の文脈をより明確に意識し、それを〈心付〉に用いる点にあった」と捉え、その実例として西鶴作浮世草子の話題に通じる付合を示す。これらの〈ぬけ〉〈とび〉といった手法を用いた西鶴の『団袋』等における句作りは、元禄三、四年当時の前句との〈うつり〉を意識する、また、〈心付〉を基調とする元禄俳諧と軌を一にするとし、「両吟半歌仙」は「西鶴と元禄俳諧との隔絶ではなく、自らの俳諧を推し進めてゆく西鶴の一つの段階を示す」という。

さらに、『団袋』西鶴序の読みについても、「若い」に西鶴晩年の孤独や寂しさを読み取り、俳壇から取り残された心細さを伝えるとするのではなく、「両吟半歌仙」の句作内容を踏まえての序文であることに注意を喚起する。そして、「両吟半歌仙」の、「内実は、元禄新風俳諧と自らの俳諧との接点を見出し、それを実践しようとする積極的な試みに満ちたもの」と、従来の「西鶴が元禄俳諧と自らの俳諧との隔絶を意識し、そのため団水との両吟を半ばで中断せざるをえなかったもの」とする評価を一新する。

これらの論証は、精緻な読解に基づいて西鶴俳諧の付合に対して独自の視点を打ち出しており、乾裕幸氏、今榮歳氏等先学の研究をさらに進めた西鶴俳諧研究であるとともに、元禄期俳諧の展開をも視野に入れた好論であり、さらなる展望を期待することができる。また、当時、京都の俳壇で活動していた団水との関係

から捉えることにより、当時の俳壇や俳風の状況下における西鶴の位置づけがより明らかになるという着眼をも評価することができる。

なお、本論文に深く関連する以下の二論文も参考論文として査読することとした。

「元禄初期の団水と西鶴—「特牛」を中心に—」（『国語と国文学』平成18年9月）には、西鶴晩年の俳風の変化への関心が述べられており、受賞論文に繋がるものである。論旨は可休編『物見車』での西鶴に対する批判に対して、西鶴の門人団水が「特牛」でその反駁を行うが、西鶴自身の反駁書『俳諧石車』との関連から、西鶴と団水との当時の俳諧観を論じたものである。本論にあっても、水谷氏は団水が「未曾有」に主張する「特牛」とは異なる俳諧論を取り上げ、団水の俳諧観は、当時流行の京都の連歌風俳諧と宗因風との折衷をはかる西鶴の姿勢とその実践とに、共通性が窺われるとする。

「西鶴晩年の俳諧と浮世草子」（『東京大学国文学論集 二号』平成19年5月）は、連歌風・有心正風体の京都を中心とした元禄初期俳諧に対する西鶴晩年の俳風を捉え、西鶴の浮世草子との関連を論じ、受賞論文にいう「西鶴の浮世草子の話題に通じる付合」を具体例で示した論考でもある。疎句体が中心の元禄俳諧の俳風に同調しながら、伝統的な付合語を重視する西鶴の姿勢を『西鶴独吟自註絵巻』の自註から指摘し、当流俳諧に対して宗因風の発展的継承を西鶴が意図すると指摘する。それは、当流俳諧への妥協を余儀なくされたからではなく、積極的に〈心付〉を基調とする疎句体を取り込みながら、付物に寄りかからず〈俳言〉による〈俗〉の文脈を重視する西鶴自身の俳諧の実践であると指摘。さらに「物見車」への反駁書『俳諧石車』の西鶴の言辞から、付合の中に人々の生活や心情などが形象化されることを求める西鶴の姿勢を読み取り、それが浮世草子との共通テーマとなることを、『西鶴独吟自註絵巻』と浮世草子との実例で示し、世の風俗、世の人心への意識をさらに強めた付合がなされていることに注目する。そして、西鶴晩年の俳壇復帰が当流俳諧への妥協でないことを論証する。

これら三論文は、西鶴・団水の動静から、元禄初期の西鶴俳諧の評価を浮世草子にも言及しながら、広い視野から見直すという連繫した論考であり、また、類似するテーマを扱いながら論証に重なることなく、互いに補完し合う緻密な読解と構成が取られている。受賞論文は前二論文からの発展であり、本論文をもって日本古典文学学術賞に価する論文として十分に評価することができる。

第34回 国際日本文学研究集会

第34回国際日本文学研究集会を11月27日(土)、28日(日)の2日間、当館2階大会議室で開催します。以下にプログラムを掲載します。

テーマ「書物としての可能性—日本文学がカタチになるまで—」

1日目 11月27日 土

第1セッション

司会

相田 満 (国文学研究資料館准教授)

研究発表

① 懐風藻の出現

—書物としての漢詩集がなぜ作られたのか—

李 満紅 (早稲田大学大学院博士課程) …… 13:10 ~

② 日本漢詩における対句の形

—平安前期の日本漢詩における隔句対の運用をめぐって—

顧 姍姍 (東京外国語大学大学院博士課程) … 13:40 ~

③ 『夜窓鬼談』と中国の志怪小説

—冥界説話を中心に—

盧 秀満 (文藻外語學院助理教授) …… 14:10 ~

第2セッション

司会

村尾 誠一 (東京外国語大学教授)

研究発表

④ 江戸時代における「源氏物語」の俗語訳

—解釈と弄び—

レベッカ クレメンツ
Rebekah CLEMENTS (ケンブリッジ大学大学院博士課程) … 14:55 ~

⑤ 翻訳と日本文学の再誕生

—『蜻蛉日記』の韓国語訳—

李 美淑 (ソウル大学校 HK 研究教授) …… 15:25 ~

⑥ 平安女性叙事文学の誕生を考える

張 龍妹 (北京外国語大学教授) …… 15:55 ~

ショートセッション

司会

戸松 泉 (相模女子大学教授)

① 「うつほ物語」の成立と〈絵解〉の関係

伊藤 禎子 (学習院大学非常勤講師) …… 16:40 ~

② 「栄花物語」の夢の可能性

—記録から物語世界へ—

吉田小百合 (総合研究大学院大学博士課程) …… 16:50 ~

③ 「フォークロアとナラトロジーの間に挟まれた歌物語」

リュドミラ エルマコワ
Liudmila ERMAKOVA (神戸市外国語大学教授) …… 17:10 ~

④ 思い出す楽しみ・苦しみ:『樋口一葉日記』・『十三夜』・『にごりえ』における回想

カタジーナ ソンネンベルグ
Katarzyna SONNENBERG (ヤギエロン大学大学院博士課程) … 17:25 ~

⑤ 佐佐木信綱と『漢訳万葉集』の成立—銭稲孫との文通を媒介に

スウ 鄒 双双 (関西大学大学院博士課程) …… 17:40 ~

⑥ 「『名詞』から作られる『時間』

—谷崎潤一郎の『痴人の愛』

岩谷 幹子 (東京大学大学院博士課程満期退学) … 17:55 ~

2日目 11月28日 日

第3セッション

司会

渡辺 憲司 (立教大学名誉教授) …………… 10:30 ~

研究発表

①『英草紙』の素材選択から見る庭鐘の創作意図

—庭鐘と中国白話小説『醒世伝言』との関係から

任 清梅 (中国聊城大学日本語教師) …… 10:30 ~

②日本近世における『智囊』の受容・文学的側面と教学的側面

劉 穎 (安田女子大学非常勤講師) …… 11:00 ~

③近世怪異小説と心学

—『主従心得草』を例として—

門脇 大 (神戸大学大学院博士課程) …… 11:30 ~

④「永享五年八幡縁起絵巻の生涯とその余生」

Melanie TREDE (ハイデルベルク大学日本美術史教授) …… 12:00 ~

第4セッション

司会

中川 成美 (立命館大学教授) …………… 13:45 ~

研究発表

⑦〈助六〉をめぐる江戸中期の煙草文化と歌舞伎における「型」の発展

Tove BJOERK (立教大学大学院博士課程) …… 13:45 ~

⑧与謝野晶子訳『蜻蛉日記』の成立

—堺市蔵・自筆原稿の考察を中心に—

足立 匡敏 (大阪太谷大学非常勤講師) …… 14:15 ~

⑨国民国家と文学：北米・南米と改造社の『現代日本文学全集』

Edward (Ted) MACK (ワシントン大学准教授) …… 14:45 ~

公開講演

「英国における明治時代の日本研究と書物交流：日本文学の本格的紹介（翻訳）の前段階として」

小山 騰 (ケンブリッジ大学図書館日本部長) …… 15:45 ~

総括 …………… 17:00 ~ 17:10

ポスターセッション発表者

担当

『源氏狭衣歌合』の番の構造～両作品の影響関係を中心に～
オルタナティブな媒体としての同人雑誌・昭和初期の新民話
雅浩について
形との遊び、またはジャンルの追及—5行、4行、3行で翻訳
された短歌、俳句『みだれ髪』刊行に学ぶこと陳 捷 (国文学研究資料館准教授)
山本 美紀 (創価大学大学院博士課程)齋藤 柱 (京都市立芸術大学非常勤講師)
Aida SULEYMEANOVA (国際日本文学研究センター外国人研究員)
小曾戸明子 (医師)

「集と断片」シンポジウム

9月10日、早稲田大学でシンポジウム「集と断片-日記と紀行の時空-」を開催しました。当館と学术交流協定を締結しているコレージュ・ド・フランス日本学高等研究所との共催です（「国文研ニュース」N0.16）。約50名の方がご来聴下さいました。

日仏8名の研究者がパネリストやディスカッサントとしてご登壇下さり、平安から現代に至る日記・紀行文学についてテキスト編成の分析が行われました。短い作品や「断片 fragments」がどのような機能を担って「集 collections」を構築してゆくのか、登壇者とフロアの間でも活発な議論が交わされ、充実したシンポジウムとなりました。また、パリ・テイト大学のセシル・坂井先生からお心のこもったご挨拶を賜り、会場校の田淵句美子先生には総合司会を務めて頂きました。

「集と断片」をメインテーマとするシンポジウムは、引き続き、来年と再来年の秋に開催する予定です。詳細は当館HPでご案内いたしますので、ご参照頂ければ幸いです。

【開催情報】

「日本文学における言説編成機能に関する日仏共同研究」
2010年度シンポジウム 集と断片-日記と紀行の時空-

平成22年9月10日（金）13:00～17:00
早稲田大学早稲田キャンパス 国際会議場第1会議室

- ①今西祐一郎（国文学研究資料館長）
「日記」と「歌」-平安仮名日記の「集」と「断片」-
ディスカッサント 寺田澄江（INALCO 教授）
- ②ブリジット・ルフエール（CRCAO 博士研究員）
野上弥生子の「日記契約」
ディスカッサント 宗像和重（早稲田大学教授）
- ③堀内アニック・美都（パリ・テイト大学教授）
江漢西遊記日記を通して見る近世後期文人層の行動と社会観
ディスカッサント 鈴木淳（国文学研究資料館教授）
- ④千本英史（奈良女子大学教授）
鴨長明『発心集』-一人称的叙述のありようについて-
ディスカッサント ミシェル・ヴィエイヤール＝パロン（INALCO 教授）



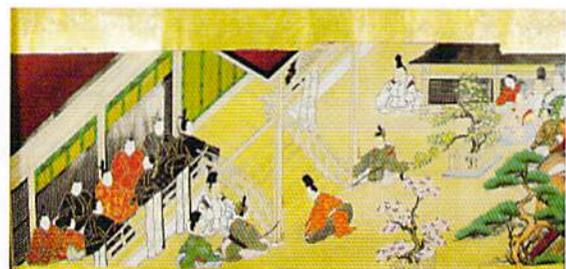
新収資料展 「物語そして歴史-平安から中世へ-」

国文学研究資料館では、平成23年1月24日（月）～3月18日（金）の期間で、「新収資料展 物語そして歴史-平安から中世へ-」を開催します。

本展示では、当館が近年収集した資料を中心に33点を展示します。是非、ご来館くださいますよう、お願いします。

■開催情報

開催期間：平成23年1月24日（月）～3月18日（金）
休室日：土曜日、日曜日、祝日
開室時間：10:00～16:30
場 所：国文学研究資料館1階展示室



「うつほ物語絵巻」（当館蔵）

総合研究大学院大学 平成 22 年度入試説明会と特別講義

国文学研究資料館を基盤機関とする総合研究大学院大学日本文学研究専攻は、10月16日に翌年度（平成23年度）の入学試験について説明会を行いました。

本年は13人の参加者があり、日本文学研究専攻及び入試に関する説明があった後、施設案内として院生の研究室、図書室や講義室の見学や現役の院生との懇談が行われました。

また、跡見学園女子大学教授の神野藤昭夫先生から「与謝野晶子の源氏物語翻訳と自筆原稿」と題した特別講義が行われました。

参加者からは、「総合研究大学院大学の特色・魅力が良く分かり、パンフレット・Webページで感じた以上に入学したいという気持ちが強くなりました」等の感想が聞かれ、大変充実した説明会となりました。



入試説明会の様子

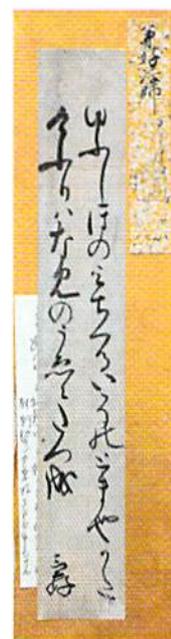


特別講義を行う神野藤先生

表紙写真紹介

鉄心斎文庫所蔵『古筆短冊鑑』の冒頭に貼られた兼好法師自詠の一枚。模様のない白い紙（素紙）に書かれており、後世の短冊に比べて寸法も小さい。これは素紙短冊（白短冊とも）と呼ばれ、南北朝期、短冊が誕生したばかりの頃の特長をよく示している。

歌の意味は、「夕潮が満ちてくる磯に粗末な苦屋が建っている。その苦屋から細くたなびく煙は満ち来る波の上に立っているように見える」というもの。苦屋だけが建つ、何もない夕方の海岸の情景を描くのは、三夕の歌の一つ、藤原定家の「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苦屋の秋の夕暮れ」を踏まえて詠んだものであろう。



国文学研究資料館賛助会では、旧日本古典文学会から引き継いだ古典文学の複製本31点を10月15日（金）に立川市へ寄贈しました。これは古典文学を原本のまま複製したレプリカで、教科書だけでは知ることのできない、原本の姿にふれることのできる有益な教材です。

今後、寄贈された資料は、立川市内の全小中学校、立川市中央図書館、立川市歴史民俗資料館に配布され、学校の授業で使用する等、有効に活用される予定です。



寄贈の様子（左）

● 多摩モノレール高松駅での当館展示

現在、多摩モノレール高松駅で当館紹介の展示を行っています。
 展示全体を絵巻のイメージで作成するとともに、重要文化財に指定された当館所蔵「春日懐紙」の複製を展示しています。
 お近くにお越しの際には、是非ご覧ください。



● 閲覧室カレンダー 2010年10月～2011年1月

■青は休館日 ■黄色は土曜開館日

11月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

12月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

1月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

開館 9:00～18:00 請求受付 9:30～12:00 13:00～17:00 複写受付 9:30～16:00
 ただし、土曜開館日は、開館 9:30～17:00、請求受付 9:30～12:00 13:00～16:00
 複写受付 9:30～15:00



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
 〒190-0014 東京都立川市緑町10-3
 Tel.050-5533-2910 Fax.042-526-8604

発行日 平成22年11月26日
 編集 国文学研究資料館広報出版室
 印刷所 三鈴印刷株式会社
 ©人間文化研究機構国文学研究資料館